

・本冊子は、二〇二二年四月から二〇二三年四月まで「高山市民時報」紙に連載されたミニ法話「響」から一部を選び冊子化したものです。

## 目次

生前中は	三島 多聞（高山別院輪番）	2
鬼	伊達 晴香（稱讚寺坊守）	5
真理をきく	達 顕信（元高山教務支所職員）	8
「足音」に聞く	帰雲 真智（還來寺住職）	11
八月の願い	四衢 亮（不遠寺住職）	14
共に生きる	白尾 公信（了心寺住職）	17
リリース&キャッチ	窪田 純（圓徳寺住職）	20
安心して迷える道	三島 大遵（真蓮寺住職）	23
君たちがいて僕がいる	江馬 雅臣（賢誓寺副住職）	26

# 生前中は

三島 みしま

多聞 たもん

(高山別院輪番)

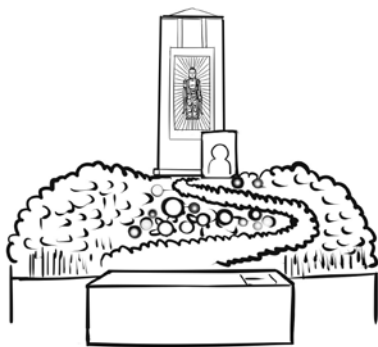
母が亡くなったとき、多くの方々の弔問を受けました。挨拶を受けながら、「生前中はいろいろお世話になりました、ありがとうございます」と応答しました。多くの方々もそうでしょう。ではこの言葉の意味は何でしょうか。生前中とは何を言っているのでしょうか。「生まれる前の中（あいだ）、お世話になりました」とは何か。「亡き人がこの世に生まれる前にお世話になった」では大変なことになります。では、どこに生まれる前なのか。考えてもわからないでしょう。でも、どなたさまも「往生浄土」の言葉はご存知でしょう。この言葉に「生前中」の意味を解く鍵があります。

正解は、「亡き人は、このたびみ仏の浄土に往き生まれました。そ

れにつけても、み仏の国に生まれる前のこの世では、いろいろお世話になり、ありがとうございました」です。そうしますと「生前中」の意味が了解されるでしょう。「往生浄土」の教えが「生前中は」という挨拶になっていくのです。そう信じたくなければ「存命中は…」と挨拶すればいい。でも変ですね、仏式で葬儀を出しているのですから。こうなると葬儀をどのように考えているのか、自問してみる必要があります。でないと、葬儀は社会通念上の単なる通過儀礼になり、テレビで宣伝しているように、「まかせてよかったな」で終わります。真宗での葬送の儀は、阿弥陀さまが中心です。いつの間にか遺体中心となり、最近ではそれ冷房だの暖房だの椅子席だのと、参る方が中心となった。さらにコロナ感染で一変し、会場入口で焼香して終わりとなったのです。

中心になるものがはっきりしないと、大切な人の死を出来事として

片づけ処理してしまうことになり、家の若い者に人間処理の見本を見せているようなことになります。人の死を片づけ仕事にするのは、生きていることを片づけ仕事にしていることにならないでしょうか。



## 鬼



伊達だて

晴香はるか  
(稱讚寺坊守)

幼い頃から、ずっと気になっていたものがある。自坊のお座敷にお坊さんが着る衣、つまり法衣ほうえを着た古い鬼の土像がある。それが何なのか生前の祖父や父に聞いても、誰も知らなかった。

何年か前に滋賀県の大津へ行った時のことである。お土産屋さんで古い風刺画が描かれている「大津絵」というものがあった。その中に「鬼の念仏」という絵があった。法衣に身を包んだ鬼がそこには描かれていた。

気になって、高山へ戻ってから「鬼の念仏」について少し調べてみたところ、大津絵の代表的な題材だそうで、「無慈悲で残酷な心を